

ました。今は天文の研究も非常に進みどんな立派な天球儀でも手に入りますが先生の天球儀は今を去る事百五十年前の製作であつて先生が天文研究の爲めに盡されし熱心と努力の程を考へて見ますと實に想像も及ばぬ位で一種言ふべからざる畏敬の念に討たれたのであります機會があらば一度先生の故郷を是非尋ねてお墓にも参詣したいものであると思つて居りましたが生憎其の機會がなく常に遺憾に思つて居ました處今回突然縣教育會の方より四月三十日の梅園祭に参列せよとの事でありました。参る事は非常に嬉しく思つたが行けば何か先生の事に關して講演をせねばならぬこの事講演には聊當惑しました何分にも時日は少しお集りの皆さんは本家本元で先生の事に就ては幾多の人からお話を聞になつて居るうれは私は先生の事に付て見たものごいへば梅園全集をも拾ひ讀み西村天四居士の書かれた學界の偉人縣教育會で編纂にかつた大分縣偉人傳位のものでありまして先生の徳を頌するには餘り淺薄でありますが只私が自分で先生を敬慕して居る点を少々演べて見たいと思ひます。茲に今一つ斷はつて置かねばならぬ事は此集まりであります小供の方によくわかる様に話さうと思へば大人の方には餘り小供らしい話になり大人の方によく分る様に話せば小供の方には六ヶ敷くなり中庸を得る事は實に困難でありますが成るべく平易にお話を致さうと思ひます。さて只今先生のお作りになつた天球儀を拜見して私は一種言ふべからざる畏敬の念に打たれた事を申上しました平たく言へばぞつとする様な感じがしたと申上しましたがそれは何故であるかと言へば先生の學識の深遠なること

は元よりでありますすがそれ以上に時代に反抗されたことであります。先生のお生れになつた時代は今と全く趣を異にして居りまして學者でも何でもうつかりしたことは言へない假令どんな偉い人がどんな珍らしい學説を著つて居つても迂濶に言ふものなら直ちに切支丹宗としてお上からひび目に遭はされたのであります。其の切支丹宗といふは即ち今の耶蘇教でありまして天文年間に始めて鹿児島に渡來し九州一バイに廣まり中就豐後の大友氏の如きは眞先に洗禮を受けられたのであります。佛敎嫌ひの信長が之を歡迎して京都に南蠻寺を建て暫の内に南は九州の果より北は東北に全國一体に廣まりましたがさあうなると色々な事が起りまして西洋人はこの國を取るのでも先づ宗教を先に入れ人心を和けて國人が悉く耶蘇教になつた所で其の國を取る方針である事が段々知れて來た。さあうこの時の幕府は之を嫌つて悉く根たやしをせようとかゝつた。中にも三代將軍家光の時には切支丹になつて居るものは皆打首にされた。疑はしいものは俵に入れて轉ろがしたうして皆佛敎に入れたうれから後徳川代々の將軍は耶蘇教を絶体に禁じました。其影響は烈しいもので何でも耳新しい事を言へばあれは切支丹じや。ハテレンじや。之れが若しも幕府の御役人に聞えたならば直ちに打首と云ふ始末。かゝる物騒な窮屈な時代に梅園先生は世間の事には更に頓着せず一意専念天文の研究を續けられた事は只々感服の外はないのであります。今日世間一般の人は折角志を立てゝ何をやらうと思ふても一寸した障害に遭へば立ちどころに挫けて仕舞ふ。我々が是をしらべようと思つてか

二十
とる何か六ヶ敷事に遭遇すれば直ちに止めて仕舞ふ是で何一つ成功を見ないのである。そこになる。先生は偉いもので何事でも分らぬ事があればどこまでも研究して分からずには止めない。此の熱力と氣力の二つが宇宙間に於て最も深遠なる天文学の研究に志さしめた所以でありまして別に西洋の學説を藉られしわけでもなく先生の獨得の説を立てられたものであらふと思ひます。次に先生が一生の心血を凝がれし大著述即ち支語贅語敢語の三語を拜見しますものに驚くのは片言隻句も古人の言を用されざりし事であります。先生自ら謂はるゝには「余が古人の様に依らざりしは其の説を思ひしが爲にあらず唯古人が嘗て之を口にせず又之を筆に記さざれば因て襲ふべきものなければなり」云々。實に先生の偉大なる處は此一語によく表はれてゐるではありませんか。前以てお話し申せし通り時代が時代でありますから少しでも耳新しい説を出せば直ちに疑はれた世の中で何でも古くより傳はつた學説を尊重し新しい説は一も二もなくけなした時代に先生は泰然として所信を貫徹された處は實に敬慕しても餘りある事であります。今は言論の自由發表の自由如何なる珍説を吐いても咎むる人は一人もないがさて今の學者はどうでありますか随分著書も夜を日に次で出版されますが甚しいのになる。古人の學説をうつくり我者に焼直し麗々しく名乗を掲げて賣り出す。中には版權侵害の問着も起るといふ淺ましい有様斯様な連中は宜しく先生の魂死すべきであらうと思ひます。亦今の著述は杜撰極まるもので著者其者が原稿を改めないを以て傲りとして居るすら／＼と書いて直ちに印刷にかける随

分簡單なものである然るに梅園先生の著述に對する忠實さ加減聞く處に依ると支語は三十一才の時に稿を起され五十三才にて大成せられしもの。其間二十三年稿を改めらるゝこと二十三回贅語は三十四年間に稿を改めらるゝ事十五回敢語は四年間に稿を改めらるゝ事四回三十万言の大著三十八回の換稿(支語の二語)實に千百枚十萬言の大著述此外に漢文國文の著述數多あり實に先生の勢力主義の根氣強き事には贊嘆の言葉もない位であります皆さんお互に何事をやるにつけても先生の根氣の十分の一位出せば大抵のものは出来るあゝもいやだいかぬといふ時には先生の事を思出し一生懸命にやろうではありませぬか私共も永年教育の事に従事して居りますが先生の徳をあやかりて出来る限り盡す覺悟であります。

さて後世豊后聖人とも仰がるゝ先生は何所で勉強されたかと申せば只長崎に二回伊勢參宮に一回の外は大抵此の両子山の麓に孜々として著述にいらした様であります。先生自ら「吾は両子に生れ両子に老ゆ」と謂はれた言葉を見ても明かであります。さるに今の世の人は小學を終れば中學いや高等學校大學と外に出ねば學問が出来ぬ様に思つて居りますが是は時世の變遷とはいへ間違ではないかと思ふ。今先生の如き刻苦勉強をしたならば如何なる僻陋の地にありても學問の出来ぬといふことはなからふ最も滑稽なるは當世流行の洋行歸りの先生は間々外國にありて日本譯の書物を讀み高い學位を購ひ歸るとのこと。是等の事を梅園先生地下に聞かれなば如何に膽甲斐なく感ぜられるでありませうか皆さん古人の言葉にも「精神一到何事不成らさ

らん」といふ事があります假令如何ある山奥に居りましても自分で一度やろふと志した事は堅い決心さへあれば屹度出来ぬ事はなかるうかと思ひます。

次に梅園先生の心性が如何に高潔であらせられたかといふ事を少々述べて見たいと思ひますとかく今の世の中は名を賣らねばならぬと己の名前を賣る事にキョ／＼して居るがうに於ると先生は泰然としたもので努めて人に己の名を知られぬ様にせられた形迹が見えます時勢が如何に騒しかりうがらんを事には更に頓着なく此の両子の麓に居られてこつ／＼と勉強し著述と教育と一身を委ねられた。先生のあされた事は須らく學者のあすべき本分であらうと思ひます。當時如何に先生が名聞を避け山奥に引込まれて居られても其名はかくし得ずして遂に玖珠の久留島侯から聘を厚くして招かれました此時にも先生は固く／＼辞退をされて曰はれるには「朝に汗溪の水を飲み夕に双山の雲に臥す吾に放てか足れり」と是れ何たる高潔なる言葉ぞや朝に夕に榮利の聲に奔走する利己一篇の輩は此言葉を聞いた何と感ずるでありませうか。久留米の有馬侯から召された時にも次の詩を以て答へられました皆さんも大分お疲れの様でありますから先生の詩を下手を節で吟じて見ませうか聞き下さい「樵蹊不與世間通、高臥車山異謝公、占得烟霞吾既老、清風鶴唳白雲中」(詩吟二回)亦小倉の小笠原侯に召された時も梓築の藩侯に召された時も矢張り此の主義で通された先生の清廉潔白なる事は此の二三の話で十分盡きて居ると思ひます皆さん此十分の一だけでもよいがこゝる氣高い心に成つて見たいのであります

大分話が長くりましたがもう二三申上たいと思ひますそれは吾々が日常手本とあすべき訓育上の事であります先生方も大分お寄りでありますが吾々は誠に淺薄なものでありまして何か不平があれば忽ち表に表はるゝ教壇に立つても何か不愉快な事があれば自然と外に出る動作にあらはれる迷惑なものには生徒であるうに於ると先生は實に立派な教育者で門生に向はれても決して怒られた事は無い淳々として倦まず反覆丁寧皆人々の長所適所を取りて教育される故に頭から落膽する生徒は一人も無い先生の徳望と令名とは遠く響き渡つて浪速より四國路より此の両子の麓に集り來つて忽ちに塾舎の狹隘を告げ民家を以て之に宛てられたどの事であります何と盛んな事ではありませぬか併しおがら先生の謙徳あるいやが上にも尊く舎の趣意書なるものを拜見すれば晋は汗山の農夫なりと書き起して似よりもあらぬ一日の長を二三兄弟に推さるゝあります二三兄弟といふに至りては謙遜も極まれりと云はねはかりませぬ。併しおがら一面に於てはかくお優しい方と斗り思つて居ると又一面には儼として冒すべからざる處があつて自分の信せられた所は飽くまでも貫徹される若し門生にでも不都合な事があれば蔭では一言も言はれぬが面と向つて厳しく意見をせられる此点に至ると貴權と雖も敢て避けられる事は無い人の過ちは飽くまでも改めさせるうに於て其人は一旦過を改め善に移らば更に舊惡は咎められぬ丸で忘れた様である實に度量の大なる事も之を以て推し量る事が出来様と思ひます。

諺にも「言ふは易く行ふは難し」と申しますが先生は實に實踐窮行の人であります聞く處によ

れば先生が親を喪はれてより毎日々三度其墓に詣でられたと云ふ事であります皆さん、是は簡單な事ではありませんが實際に行へん事であります先生が日に三度先人の墓に参られたといふ事は「死に仕ふる事生に仕ふるが如くせよ」といふ所から日に三度（朝晝晩）御挨拶をなされたのであります此に集りの子供衆は必ず朝夕二度の御挨拶「お早う」「お休み」と云ふ位な事はなされるに間違はないが是丈の事でも毎日となる六ヶ敷い私は今日お集の方に願ひますが是丈でも結構でありますからまだ實際に行なつて居ない人は今日の梅園先生の御祭を記念として毎朝夕父母の前に出て丁寧に御挨拶をして戴きたい先づ簡単な事から一つでも實行して貰へば百五十年前の地下の梅園先生が今日生きた教訓をなさる事になる即ち今日の梅園祭が生きて来る事になります。

最後に今一つ申述べたい事は誰でも先生に何か書いて下さいと言へば直ちに知耻耻を知れと書いて渡されたらうである實に世の中を達觀されたもので今日耻耻を知らぬ人間が段々殖へて來つてあります少々位耻耻をかくされても己に利益さへあれば平然と澄し込む世の中であります。

歴史の上を見ますと先生の言はれた知耻耻の最もよく人心に浸み込んで居つた時代は鎌倉時代で一種の武士道と云ふものが出来た位であります當時の逸話に鎌倉權五郎といふ武士がありまして戰場に於て敵の矢を面に受け喰ひました傍に居合したものが面に土足をかけ矢を抜かんとしたたが權五郎大に怒り其の無禮を咎め跪きて之を抜かしめたと云ふ話もあります又金錢の借用証

にも返済せざる時は人中にて恥かしく下さる可く候とは如何にも恥と云ふ事を生命全様に考へし事がよく表はれて居ります「恥を知れ」皆さん恥を知らざるものは禽獸と撰ぶ所はありません。恥を知らない人間が澤山出来ましたならば其村なり其郡なり能く治まる氣遣はありせん皆さんどうか先生の教へられた此二字を常に記憶して居られて人より辱を受ける事のない様に致したいものと思ひます。

教育者としての梅園先生學者としての梅園先生政治家としての梅園先生經濟家としての梅園先生申し上げるは數限りの無いものでありませうが不徳薄識の私共があまりつまらぬ事を餘計に申上ては却て先生の御徳を汚す様の事があつては實に相濟まかい事と思つて此の邊で止めますが私の學校には疾く先生の餘徳を生徒に普からしめんとの考より二三年前に講堂に於て先生の御肖像を祭り盛んなる頌徳祭を行ひ常に講堂に先生の像を掲げて敬慕の中心として居ります之に依て幾多の生徒は偉大なる感化を受ける事でありませうが。之と全時に梅園先生を出した此の地方の人々が如何に幸福であるかといふ事を考へるのであります皆さんが朝夕此土地に居られて先生の遺訓をよく守り怠らず勵まれたならば必ずや此村は大分縣の模範村となり又もや第二の豊后聖人を出す事も出来やうと思ひます。

返す／＼も先生は口の人ではなく實踐窮行の人でありますどうかお集の皆さんが私の申上げた事を只一つでも御記憶になつて是は學はねばならぬ事であると思召になつたならば今日から直

ちに實行して貰ひたいさすれば此の祭典の主旨にも叶ひ亦私のつまらぬ講演も全く無駄には終らぬ事となります余り長くなりますから是で失禮します。

學者の資格

杵築中學校長 野村禮讓氏講演

午前より引き續きての講演で皆様も大分お勞れの如く拜見しますがさて私の腹案は大抵前講師諸氏よりお話されてしまつて實に私は貧乏圖を取つたと思ひます。先年某先生の頌徳講演會の際天下の名士を招聘しての講演がありましたが後の順番となつた某名士は非常に困つたと言ふ話がありました私が私如き貧弱なる材料しかもつてゐないものは後廻となつて誠に困つてゐる次第で其某名士には大に同情に堪へない次第であります。

私の本日の演題の學者の資格といふのは主として梅園先生は學者として如何なる學者であつたかといふことであります。私は梅園先生は學者としての資格をよく具備された人だと思ひます。一たい先生のたてられた學說即ち先生が終生御研究なされた多くの研究は今日の語でいへば一種の哲學でありませう。此の哲學といふものはどんな學問であるかと申しますれば是には定義も種々ありませうが「此の世の中の自然の法則即ち天地間の種々の真理の奥を研める」學問で語をかへていへば「科學の科學」と言はれてゐる。即ち諸種の學問を綜合統一してゐる所

の一つの學問で近代文明の發達につれて地理歴史倫理物理化學生理といふ鹽梅に多くの學問が起つて來て今より一昔には靈魂が腹中に存在してゐることが承認されてゐたが生理學の起るに及びて研究の結果吾人の頭蓋中に一種靈妙なる髓をなす腦髓と云ふものありてこの命令によりて五體が活動すると云ふことにおつて魂が腹中に存在すると云ふことが危ふまれるに至つた。又一方では人間の起りは神が造つたものであると考へられて居たが動物學の進歩につれ進化論起るに至り人間は最初極めて下等なる動物より漸次進化して猿の如き高等な動物となり遂に人類となつたと云ふ説が立てられ造物者が造つたと云ふ説は全く信ぜられなくなつた。又物理學が研究されては種々な物體の運動に關する規則が発見せられ是を普遍的に他に適用せらるゝに至つた。かくの如く澤山な學問が非常な勢で起つて來たが是等の多くの學問を統一してここに何等かの共通せる眞理を発見せんとして研究するのが即ち哲學であります。是に依つて考ふれば先生が多くの學問に通曉せられて居たと云ふことは先生が宇宙の眞理に疑を起された即ち哲學の研究上自然の結果として廣く學問をお研究なされたに依ると思ひます。故に梅園先生を大政治家であるとか大經世家であるとか云ふのは先生のお研究された多くの學問中の一つによつて下したる斷定に過ぎないと思ひます。

一たい今の世の中の學者の態度を批評するものを考へて見るに是れには二つの見解が立つと思ふ。一つは哲學などを研究するものは只非常に六ヶ敷理論にのみ渡りて此の世の中をば餘り

裨益しない只机上の空論のみをする者で左様な社會の爲にならぬ様な學問をする必要はない少しでも學者は世の爲になる様な所謂『詩を作るよりも田を作れ』といふ主義で哲學などは不要だといふ説と今一つは今日の學者は折角立派な學問をして多くの金と勞力を使用してしかも他日社會に出づるや官吏となり商業家となり政治家となり而して成るべく世の中を上手に渡らん事に務め世人より種々に攻撃されてゐるが是は非常につまらぬことで學者はどこまでも學者として世間の毀譽褒貶に頭を悩ますよりも俗社會を超越して確固たる自己の所信に向つて研究を續けるが學者の本分だといふ説とがある。此兩説は何れも誤つて居ると思ふ。そこで學者は世の毀譽褒貶に左右せらるゝがよきか或は是れは一例であるが或る學者のやうに日清戦争の當時自己の學問の研究の爲めに四國の沿岸に行かれて戦争のあることを知らなかつたといふ話があるがかくの如く自己の學問の研究に世間を忘れて進むがよいか何れが良きか考へものであると思ふ。私の考へでは學者は政治家となるもよし實業家となるもよし又自己の研究に世間を忘るゝといふ迄に研究するもよし又必ずしも超然主義をこる必要もない無論世に阿諛する必要もない。要は其の人の性質境遇或は其の時代等を考察した上で良否を批判すべきだと思ふ。

然れば梅園先生は此の兩者の何れに屬してゐられたであらうか私の考へでは此の兩者と共によく備へられしかも其の中庸を得られた人であると思ふ。先生は學問を是樂として諸方面より迎へられた時も詩を送りて之を辞せられた又後先生の事が幕府の知る所となり白川樂翁は之を

聘せんとするの意をもらされたがそれは先生の最後の事で遂に是が事實としてあらはれなかつたが若し今少し天が壽命を先生に與へたならば先生は今日の先生に終らずに日本の梅園先生として今少し早く世人に照會されたかも知れぬと思ふ。そこで先生は自己の研學の爲めには祿によりて仕へる事を肯じなかつた是れ世の俗儒と類を異にする所である。又先生は政治的の才にも富み嘗て杵築侯に政治上の意見を獻言し大に利用厚生を説かれ又自ら大に殖林を成し直接に利益になることをして好模範を残された。先生はかくの如く兩者を兼有しよく其の中庸をこり時に自己の研究の爲めには祿仕を肯んせず研究を續けると同時に一方には厚生利用を説き直接世人を裨益せられたといふことは誠に學者の學者たる道をよくやつた人だと思ひます。

而して先生が百五十余年以前に於て今日の者も思ひ及ばざる程の學説を立てられしことは是れ全く天才的であらうか又神の如きものであらうか私は先生をしてかくの如く神の如くし天降りの的に考へればどうかと思ふ。先生も學者ではあつたが又人間である故に非常なる苦心研精の賜物であつて又時代思潮の影響と云ふものは慥に受けて居られたと思ふ。

今日は電氣學が發達して無線電信が發明せられ又電話では側に蓄音機の吹込機の様なものゝを裝置し話した事が直に記述せられて之れが一つの記録となつて商業上等に利用せられんとし又佛國では電話口にて話の相手が見える様に側に鏡の如きを設置して發音を送ると同時に顔をも目前に撮る様にしたいと云ふて研究されて居るうである。又一方では最近までとても不可能

だと思はれてゐた飛行機が發明され漸次進歩すると共に客を運び郵便物を運ぶに利用せらるゝに至り日本でも十時間の長飛行が行はれるに至つた。又空氣を或る器に入れ非常な壓力を加ふれば液体となると云ふことは今より七十年前より研究されてゐたが遂に此の頃はれも發明せられ此の液体の内に鐵瓶を入れる時は之を沸騰せしめ或は之を練鐵に利用して有効なる事が發明せられたと云ふ。是の如く世の中の事は實に驚く程進歩したが是れも皆久しき間の苦心研精の賜物で突發的に大發見が行はるゝものでない必ず其下地と云ふものはある。

されば先生も只天降式のものでは無くて今迄の學問の多くを熟讀玩味之れを自己のものとし自己の考を加へて一つの條理學と云ふ立派な學說を立てられたと考へるが最も至當だと思ひます。先生の玄語の如き二十三年間に二十三回稿をかへられしとか是れも月を閲みし年を経るにつれて諸方面より知識を得て書き更へざるを得ざらしめたので之に依て先生の研究の階程の進歩する模様を察する事が出来る。先生が旅行せられた事は長崎に二回伊勢に一回に過ぎざるも當時長崎は學問の中心で此時に得られた知識が少なからず先生の學說に影響を及ぼしたに相違ないと思ふ。而して是迄に大成するには非常な精力を要せし事は疑ふ余地はない。之を以て先生の非常な刻苦精勵された一端が窺はれると思ふ。

次に先生は一日三回の墓參其他神佛に詣でられたと云ふことは先生が非常に祖先を崇拝せられたことが分る。又是は先生の逸話中にある事だが杵築綾部綱齋の塾に通つて居た時常に跣足

であつた綱齋先生見るに見兼ねて草履を一足與へられたが先生は之を心良く受けられ之を穿きて門を出づれば直に懷に入れ再び跣足となり又塾に行く時は門にて草履に穿き更へられたとか云ふ事であるが實に先生は人の厚意を無にせず充分に受けられ決して逆らはなかつた事は誠に麗しい事だと思ふ。是は現今非常に流布しつゝある岡山縣の黒住教の教祖宗忠が良く父母の命に順ひて雪駄と木履を一足づゝはいて町に出たと云ふ話と思ひ合せて一層立派な事だと感ぜられる。又先生の逸話中灸の話がある或時先生が奥さんの手に依り灸をすへてゐられると老婆が來て今日は灸をすへるには日が悪いよした方がよからうと注告したすると先生は直に灸をすへることを已めたが老婆が歸ると共に再びすへた。是れをみるに一つは老婆の厚意をどこ迄も容れると同時に一つは左様な迷信にはとり合はなかつた即ち自信の強い人であつた事を證するに足ると思ふ。

終に臨み今日先生のお徳に付きて澤山なお話をお聴てありますが其中の一つ何れを實行されても立派な事だと思ひますがさて其實行と云のがなか／＼六ヶ敷いと思ひます爰にうれについて面白い話がある。印度の國ヒマヤ山は非常な高山でそれが何百里と續いてゐるが年中印度は非常に暑きにかくはらず千古の白雪を戴いてゐます。此山脈の麓に夜明造巢と鳴く非常な活潑な鳥が住んで居るが此鳥は巢を造る事を知らぬ鳥である是が晝の間は思ふ存分飛び廻つて餌をあさるさて夜になるとヒマヤ山頂より吹きをろす寒風が非常につめたので木の枝にこま

處の虚名を非常にお嫌ひでありますので若此のお祭が眞のお祭り願ひで虚名のみで一つの實果をもらへ得なかつたならば先生は寧ろ此のお祭の無い事を希望せらるゝてありませう。庶幾くば名實共に揃つた梅園祭を永久に繼續されたいものであります。

偉人の遺徳

在國東町碩田 安部 甚三郎

豐後聖人三浦梅園先生の御生れになつた西武藏村會の決議を以て先生の易簣の日即ち毎年四月三十日此村にて先生の頌德講演會を催ふして先生の遺德を頌することになりたのは誠に喜ぶべきところで先生の德澤に浴するの恩恵を忘れさるゝと共に風俗人情の淳厚に努め處世の要訣志操の向上を圖るには此の上もなき方法と存じます。私は先年大阪朝日新聞社の西村天四氏か先生及び帆足萬里先生其他吾豊後に於ける碩學鴻儒の事蹟を探るため來縣せし時別府の日名子柚軒氏と共に西村氏に追隨して其の資料の蒐集に努め梅園先生の後嗣三浦富山氏の邸に過ぎり一夕西村日名子両氏と共に先生の遺書を拜觀し且つ先生の墓にも謁し又た頌德會及び墓前祭にも列し明治四十五年贈位の恩典ありし節天四氏より『名山久矣托遺簫秋雨春風幾十年 知否人間快心事幽光發得到天邊』の七絶を送られた事もあり旁々先生の頌德と申すことには多少の縁故もあるのみならず今回の發起者たる小野元次氏とは多年の交誼もあることでありますから聊か卑見

を陳べて偉人の遺徳を頌し度いと思ふのであります人も知る如く長州の吉田松陰先生は幕末の志士で

身はたごひ武蔵の野邊に朽るゝも留め置かまし日本魂

と詠じ其身は終に幕府の毒刃に斃れしも其遺書留魂録は先生の氣魄を千載に輝やかさしむべきもので今日吉田松陰と云へば兒童走卒と雖も其の名を知らぬものはない位であるが松陰の歿後其の松下塾即ち松陰の子弟を教育した家塾に弟子共が集つた時に其の中の一人土屋囃海といふ人はなかなか文章の達者な人一世の力を振つて松陰先生の爲めに傳記を作らうと云ふことを唱へた。所が彼の高杉晋作がそれを遮つてそれは絶対にいかぬ松陰の如き大人物の傳記を如何に吾々が筆を揮つても迎も真相を寫すことは出来ぬ是は徒勞に屬するから止めるが宜い松陰の人物は松陰の遺著中に躍如として居る遺著を通讀すれば松陰其人の傳は自から分るご申されましたが豊後聖人と幕末の志士とは或點に於ては全然比較する譯には行きませぬが私は梅園先生の遺徳に對しましても東行の松陰に對する其れの如くに感ずる者であります。況や梅園全集既に公刊され梅園文庫既に設立されたる今日更らに頌徳會を催ふすの必要なきが如くに感ぜらるゝのみならず縦令全集なきも將た文庫なきも先生の偉徳は天地に瀾漫し千載に赫灼として居られるのであるから後輩の人々が兎や角と申す必要なく特に淺學無識の私が此の間に愚見を陳ぶる杯は先生の靈に對して無禮至極であります但唯前に申した緣故もありますから單に頌徳會其

のものに對して一言し度いと思ふのであります。諸君の知らるゝ如く印度の大聖世尊は五千七百餘卷の經典を貽して末代衆生の濟度に資し支那の聖人は七篇仁義の書を貽して世道人心を明らかにされてある。併し五千七百餘卷の經も七篇仁義の書も之を高閣に束ねて更らに之を講ずるものがなければ遂に佛法も滅び儒道も衰へるは必然であります。

顧ふに梅園全集は豊後聖人の後世に貽されたる經典にして之を讀めば先生の生立經歷學問識見德望等悉く明白となりて所謂人情の醇厚處世の要訣志操の向上は期せずして得らるべきである。けれども此の遺著に依りて先生の學徳を知らんとするには相當の學問と時間とを要し到底普く衆生を濟度することは出来ぬことである。

世尊五千七百餘卷の經典も之を説く八家九宗の名僧智識なくば其廣大無邊を知り難きと同様に偉人の遺徳も時に之を紹述する者なくば普ねく光明を放ちて十方世界を照らす機會を失ふことなしとも限らぬから此の西武蔵村會が滿場一致の決議を以て毎年名士を聘して先生の頌徳講演會を開らくことになりたのは即ち此の意味に外ならぬことと思ふ。況んや先生の學問は他の腐儒と異なり先賢未發の天地の玄理を窮め西人を凌駕して一頭地を抜き宇宙の真相を捉えて後人を指導し天授の靈能を發揮されしものなれば平凡膠漆の道德論と日を同ふして語るべからざるは申すまでもなきことでありますから今後年々行はるべき頌徳講演會の效果の如何は今より之を想像するに難からぬと思ふのであります。併し乍ら斯る精神的の事柄は一應始めたる以上

は飽迄永續して其目的を貫徹することに努めなければならぬ又た之を努める義務があると思ふのであります。若し發起者其人が之を永續せしむる勇氣なくば當だに先生の靈に對して相濟まぬのみならず一般社會に對しても薄志弱行の譏りを免かれぬことになるだらうと思ふのであります。薄志弱行と云ふことは普通一般に於ても大に思ひべきことであります。特に梅園先生の如き篤學の鴻儒に在りては非常に之を嫌はれましたことは先生の手記に成る支語の草稿を拜見しても直ぐに解る事柄であります。今回講演會の發起者は村長小野元次校長宮本金六の両氏に申すものゝ荷も此の西武藏村會の決議を以て決定したる以上は單に小野宮本兩氏のみの責任ではない即ち西武藏村民諸君全體の大責任であることは今更私の喋々を要しませぬところで夙に本村民諸君の覺悟して居らるゝことゝ信じて疑ひませぬところであります。事は是非善惡は別個の問題と致しまして歐羅巴の基督教徒が聖地回復のために三十年間の戦争を續け又た釋迦が二十九歳で出家して八十歳の高齡に至る迄法を説かれたのに比すれば此の豊後聖人の爲めに起した頌徳講演會が村長や校長の交迭進退に因て中絶することはありますまいと思ふのであります。つまり梅園先生の遺徳は單に東國東郡の一小部分(失禮か、知らぬぞ)たる西武藏村のみに限られたものではない廣く申さば豊後全体否日本國民全體の享受すべきものであつて従つて此の遺徳の喧傳は西武藏村民のみの義務ではありませんぬ様なものゝ遠水は近火を救はず道は必らず廻きより速きに及ばすといふ語もあることであるから豊後聖人の御生れになつた此の富永否西武藏村

民諸君は他に比してより以上先生の遺徳を享受して居る譯であるから此の頌徳と申す事に付きまして一層切實の御感じのあるべき筈である之れあればこゝ本村會が満場一致の決議を以て毎年先生易賓の日を以て講演會を御催しになることとなりたのであらうと拜察するのであります。でどうか此の清き美しき崇とき高き且つ敬すべき御精神は何時までも永續されて當に此の西武藏村のみといはず東國東郡全体に豊後全体に大分縣全体に否な日本全國は愚か洋の東西に至るまでも此の精神を貫徹せしめ吾日本帝國には今より百二十餘年前に早くも天地の玄理を説き宇宙の真相を捉え得たる鴻儒梅園先生ありしことを知らしめて世界の地理學者物理學者倫理道德經濟學者乃至宗教家等に至るまでも先生の徳と共に西武藏の名を知らしめることに努められたいと思ふのであります併し前にも述べました如く先生の偉徳は天地に瀰漫し千載に燦灼として居るのみならず先生其れ自身が名聞を好まれた方でないから今日敢えて之を弘布するにも及ばぬ様な次第なれど之を弘布するは聽て先生の學徳を普ねく世界に擴充して人情風俗の淳厚に努め處世の要訣を知らしめ志操の向上を期せしむる一端となるのでありますから私は決して無益の事でなきのみならず當代物質的文明の弊を矯正する一つの刺激劑となるべきことゝ考へまして發起者小野村長宮本校長の両氏並に西武藏村會議員諸氏及び本村民諸君の勞を多とし謹みて以上諸氏の健康と幸福とを祈り併せて本會の盛況を祝する次第であります。

拜啓来る三十日は御村に於て三浦梅園先生頌徳講演會御開催之由にて小生にまで御案内を賜はり洵に難有奉深謝候當日は參列の榮を擔ひ諸先輩の御講話により先生の御高德を追懷し自修自警の料に供し度存候處前邊より決定せる要務のため出席致兼ね如何にも遺憾千萬に奉存候思ふに方今の我國の現狀は輕俳浮華の風日に月に社會の根底に浸染し直に民衆の父となり母となりて精神的に之を指導教化すべき哲人なきにより瀾濁せる惡風潮は滔々として底止する處を知らず實に寒心に堪へざる次第に有之候格も往昔希臘半島に於て詭辯學派の人々が學問も道徳も畢竟一の空文なりとして徒らに言辞の巧を弄し民衆を惑亂せしめつゝありし際大哲人クソソチーヌ現はれて「知行合一」の穩健着實なる學說を唱へ道徳と知識を併合せしめたる勝蹟を我國東半島に出現せる大哲人三浦梅園先生の學徳俊邁にして其感化の後昆を照すもの多きを對照して更に先生の感化一層深く廣く社會に光被せしむることは現代の惡風潮を救済するに最良の手段なりと奉存候今後益々風教のため御盡力被下度切望の至りに不堪候先は右まで 敬具

中津二豐新聞社

光山百川

福岡縣立中學修猷館教諭 古庄榮治

今回西武藏ノ方々が毎年梅園先生ノ御命日ソノ御祭ヲ催サレ色々有益ノ御話ナドアルコトニナ

リマシタノハ誠ニ村ノ爲メニ結構ナコト、思ヒマス村長や校長カラ私ニモ歸リテ話シテスルカ又話ノ下書ヲ送レト申シテ參リマシタガ奉公人デアリマスカラ自由ニ歸レマセヌソレカトテ話シノ筋道ヲ書キテ送ルトシタトコロデ淨瑠璃ノ本ヲ讀ムノヲ聴クノトカたるノヲ聴クノトハ大變進フ次第デアル上私ハ筆不調方デアルカラ中々口程丁方ニ思フコトヲ書ケマセヌ私ハダシカラン講演會や演說會ニ出カケマシタガ人ノ話や挨拶口上ハソノトキノ氣持や腹藝ニヨルノデアルカラ下書ヲ作ツテ參ツタコトハ一度モアリマセヌ。

斯ル次第デアルカラ私が村長ノ御通知ニヨリ直様乘氣ニナツテ書キモノヲ作ルトシタトコロデ中々容易ノコトデアリマセヌ又今日ハ色々有志方ノ御話シガアルサウデアルカラ却テ色ケシニナツテワルイカト思ヒマスが私モ兩子谷ノ水ヲ飲ミテ生長致シタルモノニテ幼少ノ時カラ梅園先生ノ立派ナエラキ人デアルコトヲ聞キテ感テ居リマスシ今度ノ御催シガ大變結構ナコト、考ヘマスカラ西武藏ト云フ一ツノ身内ノモノト考ヘ御祭リニ對シテホソノ御念佛旁々御挨拶ニ兼テツマラヌコトヲ遠慮ナシニ申上マス。

扱テ梅園先生ハ今ヨリ百何十年前ニ生レタ人デアルカ又ソノ時代ハ國東地方ニ學者ガ澤山アリ學問ノ風ガ盛デアツタカドーカ。
新聞や雜誌ガアツテ日本國中や世界ノ模様ガドン／＼ワカリ覺エズ人ガ學問ニ奮發スル時デアツタカドーカ。

今ノ様ニドシ、立派ナ書物が田舎ノ方ノ人ノ手ニムヤスク入リタカドールカ。

世間一般ガエラクテ先生ガ奮發セネバ人カラ馬鹿ニサレル様ナ事デアツタカドールカ。

先生ノ家ハ貧乏デ人カラ馬鹿ニサレテ先生ガハガユデタマラヌヤウナ事がアツタカドールカ。

隣リ近傍ニ先生ナリ先生ノ家ヲ追ヒ越スヤウナ模様ガアツタカドールカ。

先生ハ學問ヲシテ金儲デモシユウト云フ者ヘガアツタカドールカ。

以上ノコガアツテ大勉強サレタノデモ感心至極デアルガ先生ハソシナコトハ一ツモナク只立派ナ心ノ働キカラ色々ノ不便ヲ忍ビテ怠ラズ學問ヲ勉強サレタノデアル。先生ハ學問ヲシテ威張ラウトカ人ナ下シキニシヤウトカ名ヲ賣ウトカ云フ賤シイ者ヘカラデナイソコガ先生ノ大ニエライ所デアル品ノアル所デアル。

先生ニハ小供ノ時カラ四ツノ寶物がアツタソレハ徳トオト根氣ト體ノ丈夫ト云フコトデアツタ先生ノ此ノ四ツノ寶物ハドレモ年ヲ取ルニツレテ工合ヨク殖ヘテ來タリ又ヨクツワイタリシタコノ寶物が種子トナツテ大キナ學問ガ出來タノデアツタソレデ先生ノ寶物ハ前ノ四ツト學問トデ五ツトナツタノデアル。

梅園先生ヲ見習フト思フナラハ徳ト根氣ト體ノ丈夫ト云フコトヲ心掛ケネバナラスト思ヒマスオハ之レハ生レツキデアルガ徳ト根氣ト身體ヲ基トシテ物事ニヨク心懸ケ勉強スレバ相當才モ延ビマス。

梅園先生ハ五ツノ寶物ヲ持タレテ居リマシタガ今日西武藏ノ人ハ梅園先生ヨリ一ツ丈ヨケイ寶物ヲ持ツテ居リマスソレハ梅園先生ノ寶物ト共ニ梅園先生ヲ持ツテ居リマスカラデアル西武藏ノ人ハコノ大キナ寶物ヲヨク、ツカワネバナラスト思フ。

先生ノ寶物ハ端カラ調デレバマダ澤山アリマス用心深クシテ大膽デアツタコトモ明ナコトデアル鼻ノ先デ人ヲアシラハヌ人デアツタニ違ヒナイ

先生ニ斯様ニ大變態ガアリオガアリ根氣ガアリ用心深クシテ大膽デアリ又鼻ノ先デ人ヲアシラハヌ人デアツタコトハ先生ノ著サレタ書物ノ中ナドニ何ンボデモソノ証據ガアル。

先生ノ學問ハ大變深クシテ廣ヒ甚失禮デアルガ早ワカリスル様ニカリニタトヘテ云フト大工モ出來ル左官モ出來ル石工モ出來ル桶屋モ出來ル神官モ出來ル山法師モ出來ルト云フヤウナ人デア

今日文學博士デアツテ醫學博士デアルト云フヤウニ博士ノ号ナ一人デ二ツモツテ居ル人ハ十人ナ越サヌガ先生ハ今日世ニアルナラバ三ツ四ツ位ハ博士号ヲ持ツ人デアルト思フサウ申シタトテ今日ノミナ、博士ヲ五人カ六人集メタトテ梅園先生ノ様ナ大キナ立派ナ人ハ中々出來ヌト思フ。

ツマルトコロ梅園先生バ品ノヨイ風味ノアル大人物大學者デアツタ米ノ飯ト云フ様ナ人デア

今日ハ西武藏ノ學校生徒サシノ父母ノ方ガ御見ヘニサツテ居デアラウガアヤマキガ大世話
ニナリマシタ。

生徒サシノ方ノ中ニハカウ思フ方ガアルカモ知レヌ。

ソレハ梅園先生ハ生レツキ大變エライ人デアランナ人ハ百年二百年ニ一人出ルカ出ラヌデア
ル自分等ハ何ンボ勉強シテモ梅園先生ノ様ナ人ニハナレヌソレデ先生ノマモ出来ヌ又シテモ
ツマラヌ中學ニモ師範ニモ高等女學校ニモ行カヌデアアルカラトモシソナ考ガアルトイケマ
セヌ。

百人ガ百人否百人ニ一人モ梅園先生ニハナレヌセヌガ梅園先生トテ若イトキカラナグレタリナ
マケタリ小成ニ安ズルト云フテ少シモノガ出来狭キ田舎デイバレルトカ一番エライトカ思フ
テ普通ノ人ノ通りノ考ヘテ早クカラシヤウモノナラ村ノ爲メニモナラネバ日本ノ國中ニ聞ユル
様ナ人ニハナラヌデアアル梅園先生チ手本ニスルト云フノハ梅園先生ノヤウナ學者ニナレト云
フノデハナイ人ハタマモツテ生レタ質ニ相應シタ出世スレバヨイデアアル出世ト云フノハ學者
ヤ役人ニナルコトバカリチ云フノデハナイ皆サシノ産レツキノ才ヤ家ノ都合カラ云フテソノ株
カラ長ク大キク出来ラルハダケ出世スレバヨイデアアルソノ株カラ出来ラルハ丈ノ出生ト云フ
ノハソノ株チ基トシテ一生懸命ニナリテ行クコトデアアルソレテ皆ヨイ百姓ニナルトカ大工ニナ
ルトカヨイ石工ニナルトカツマリドコカラ見テモスキマノナイヤウニ一生懸命ニナレバヨイノ

デアアルヨイ人民ニナルカ梅園先生チ學ブデアリマスヨイ人民ト云フノハ惡チタクナマズ眞面
目ニ自分ノ務ヲ盡スト云フコトニナルデアアル小才ガアルトカ小學問デアアルトカスルトソレヲ
使ツテ惡事不正チハタラクモノガアルソシナ人ノ小才ヤ小學問ハ世ノ中ノ害ニナリ又自分チ害
スルモノデアアル惡事チナス時ハ常ニソノ惡ハ自分ニ來ルモノデアアルコトチ知ラネバナラヌ梅園
先生ハ惡事チナスコトガ不可イト云フコトチ力チコメテ云フデアリマシタ。

梅園先生ノ云ハレタコトニコンナ意味ノコトガアリマス自分ノ才トカ學問トカハ自分チ益シ又
人チ益スル爲ノモノデアアルト。

然ルニ世ノ中ニハ段々自分ノ小才ヤ小學問デ自分チ苦シメ人チ苦シムル人ガアルコンナ才ヤ學
問ハ無學無才穢多非人ニモ及バヌモノデアアルハレナ人間デ惡神ガ乘リウツツテ居ルデアアル
深ク注意セネバナラヌコトデアアルト思ヒマス。

右ハ一寸生徒サシニ申上タノデアリマス何シカ御聞種ニナル様ナコトガアレバヨイガト思ヒマス
梅園先生ノ色々ナ學問上ノコトヤ政治ヤ法律ヤ經濟ノ御意ヤ一般世間ニ對スル御考ヘヤ佛ニ對
スル説ニハ中々有益ナ面白イ点ガアリマスカラソノ点ニ關スル私ノ考ヘチ今日ノ獨乙ヤ支
那日本ニ引合セ御話シシテ見タイケレドモ何分急ナコトデ時間ガアリマセヌカラ右ノ通り只一
寸大急ギニ申譯デ旁々無遠慮ニ記シタノデアリマスコトヘタノ長事デ御退窟デアツタラウト
思ヒマスガ終リニマア一事申上マスノハ両子山ノ高サガ毎年何程カ變リ西武藏ノ谷底ノ高サモ

年々何程ゾ、カ變リ居ルモノデ小供ガ大人ニナリ壯年ノモノガ老人ニナルト云フヤウニ世界ノ國々ノ有様モ年々々々必ズ變リテ行クノハ明ナコトデアル天地ノ間ノモノニ大昔カラ今日ニカケ又今日カラ何万年何十萬年後ニ同コトデアルモノハ一ツモアリマセヌ支那トルコガチトロヘ亡ビントシテ居ル一方ニハ日本ハ二千五百何十年上ニト進ミテ來テ居ル尤モ時々人間ノ病氣ヲ見タヤウナコトガアリマシタガ運勢ヨク快腹シテ來テ居リマス世ノ中ハ進ムカ退クカデアル目下西洋ニ大戦争ガアツテ居リマスガ東洋ニモ大事ノクル時ガアリマス左様ナコノ中ニ日本ガ立チテ益々進マウトスルニハ梅園先生ノ御考ヘ通り人々智ヲ磨キ德ヲ修メ大眞面目ニ世ノ中ノ人ガ上モ下モ正シキ働キチスルコトニアルノハ云フマデモナイコトデソノ点ヨリシテ今日ノ如キ眞面目ノ御會合ノアルコトハ國家ノ爲地ノ爲メ大ニ賀スベキコト、思ヒマス、私ノ話シハ止メニ致シマス

梅園祭所感記

大正四年四月三十日東國東郡西武藏村初メテ梅園祭ヲ舉行シ頌德講演會ヲ開ク予微恙アリ席ニ列スルヲ得ズ憾言フヘカラズ三浦梅園先生ノ學德ハ予ノ不肖其一端ヲ揣摩スベキニアラスト雖モ竊ニ信ス先生ハ溫良恭謙讓ノ美德ヲ備ヘ務テ實行ヲ期シ敢テ聞達ヲ世間ニ求メス後裔ノ家亦タ其遺風ヲ守ル追想スレバ明治十五年ノ夏予東京遊學中予ノ知友木下淳太郎君ハ予ニ依リ先生

遺書全般ノ借觀ヲ乞ヘリ蓋シ井上哲二郎君學事視察ノ爲メ歐行セントスルニ際シ先生ノ著書ヲ講究シ東洋ニモ寧馨人アルコトヲ歐人ニ誇稱セントスルニ因ス予歸省養父安肅從兄大明ニ謀リシモ遺書ノ散逸ヲ慮リテ許サス依テ予ハ修齡先生ノ撰定セル梅園先生行狀書ヲ謄寫シ之ヲ木下君ニ致シ其責ヲ塞ク木下君之レヲ當時ノ交詢雜誌ニ掲載シテ社會ニ紹介ス社會ノ先生ヲ崇敬スルニ至リシ一因タリ後十有餘年ヲ經テ井上哲二郎君文科大學長タリシ時大學ヨリ三語ノ借覽ヲ需メテレテ之ニ應ス是レ秘藏遺書ノ世ニ出現セシ端緒ナリ三十九年ノ秋西村天囚君先生ノ墓ニ謁シ口碑ノ傳フル所ト遺書ノ説ク所トヲ齎シ歸リ大阪朝日新聞紙上ニ於テ大ニ先生ヲ謳歌ス於是乎先生ノ學德社會ニ滂滿スルニ至ル爾後東國東郡教育會ハ頌德講演會及ヒ墓前祭ヲ舉行シ故松平親信子爵閣下監督ノ下ニハ梅園文庫ノ設立アリ梅園全集ノ發刊アリ四十五年二月二十六日贈位ノ恩典ヲ賜フ予等感泣措ク能ハサルナリ教育會又頌德碑ヲ建設シ贈位報告祭ヲ舉行ス本年二月二十四日西武藏村會ハ滿場一致毎年四月三十日ヲ以テ梅園祭ヲ舉行シ頌德講演會ヲ開クコトヲ決議ス是レ子弟村民ヲシテ永世其學德ニ矜式セシメントスルノ舉ニシテ眞ニ美事ト謂フベシ先生ノ歿後百二十餘年ノ今日ニ在テ斯ノ如キ懿德ノ表彰ヲ來セシハ偏ニ聰明至聖ナル天皇陛下ノ治世ニ遭遇シ先生ノ謙德後裔者ノ因循モ時勢ノ文運ニ伴ヒ發揚シタルモノトス先生ノ一言一行皆世教ニ裨益ヲ與ヘサルモノ莫ク之ヲ古今ニ通シテ淪ラス所謂百代ノ師ニシテ世人ノ欽慕止ム能ハサルヲ信ス今ヤ村祭トナル願クハ木像崇拜的祭典ニ陷ラス精神敬慕的祭典タラシメ

四月三十日ハ先生ノ言行ヲ談話スルノ日ニシテ吾人言行ノ惡ヲ去リ善ニ就クノ日ナルヲ忘ルヘカラス果シテ斯ノ如クハ身ヲ修メ家ヲ齊ヘ社會ニ立テ人後ニ從ハサルコト難キニアラサルヘシ予亦後裔ノ支族タルヲ以テ特ニ留意シ郷黨諸君ト共ニ先生ノ遺訓ニ背カサルコトヲ勉ムヘシ茲ニ梅園祭初回ノ祭式ニ列スルヲ得サルヲ以テ聊カ感スル所ヲ記ス

於安岐町

曾孫 三浦留七

我西武藏村ある村會は三浦梅園先生の没せられし四月三十日をもて祭日とし梅園祭と稱し今より後年毎に村人あべて業を休みこの村の小學校にて祭りする事を定め今年は其はじめのみ祭りありとてやつがれ等まで其御祭に列れこの懇ある招きにより参拜する事を得感喜措く能はず同じ招きに應せられし知名の人々の頌徳講演などもありまた其村ある節婦何某の善行を表彰する式をさへ舉げられければ今昔の感に堪す拙き歌よみ待るにあむ

永松壯三郎

君ましゝ世にかへりたる心地して今日のみ祭りつかへぬるか
里人の心のかぎり白雲のよるにたくひもあらぬみ祭り
よき人をほめあらはすも大人の世にかはらぬ里ごりにけるか

梅園先生の美徳を追懷してよめる

つゝみにし玉の光のあらはれて學びの道を今もてらせり
君が名を聞きてはうすき世の人の心もあつくあるべかりけり
古の梅のかほりて新しき石文あふく人のたへせず

詩藻

學水潺々學岳蒼 偉人曾是德音藏
誰知一樹梅花發 遠送清香薰四方

聞三浦梅園先生贈從四位

郷人因建碑頌德謹賦

樂山

梅園先生頌德祭之拙語

一章一句意豐饒 千語萬言極理條
嚴矣遺風今古鑑 德光無盡海如潮

池山完道